

演 題 名 もう一度講演の舞台へ！親身な対応によって自信を取り戻した症例

施 設 名 介護付有料老人ホーム ライフケアガーデン熱川

発 表 者 ○山崎智弘(介護福祉士)
竹内司(介護支援専門員)、金崎好弘(介護福祉士)
佐藤基樹(介護福祉士)、山下清子(看護)、杉山潤一(理学療法士)
中山千佐都(管理栄養士)、長谷川千代(事務)、岩崎航太(事務)

概 要

【はじめに】
パーキンソン病の進行により医師を辞め、ご家族との関係性が崩れ、入居後も自由に動く事ができない苦しみから感情的になる状態であった。病気に対する不安な気持ちに寄り添うことで活気ある毎日が過ごせるようになった症例。

【症例紹介】
K様 男性 70代
疾患名：パーキンソン病、統合失調症、易怒性亢進、アルツハイマー型認知症
介護度：要介護2
消化器外科医師として勤務し、定年後も地方の病院にて勤務。2006年にパーキンソン病と診断され投薬治療開始。4年後易怒性亢進を認め、職場で怒鳴る事が増え職員に抑止されていた。息子を認識できず杖で殴りかかる事もあり、病院へ入院となる。退院後は家族希望で都内の有料老人ホームに入居したが、本人希望により、県内かつ医療面で安心できるとして当施設に入居となった。

【治療（ケア）計画】
・身体状況を把握し、出来ない部分をサポートする。
・本人の病気に対する不安な気持ちに寄り添い、活気ある毎日が過ごせるようアプローチする。

【経過】
2022年1月に入居。パーキンソン病の影響で、身体が動く時間帯は自立も、動かない時間帯は活気が無く、思うように動く事ができない苦しみと早く介助をしてほしい要望から、「もうダメだ、死んでしまいたい。」と感情的になったり、職員に対し暴言もみられた。まず、身体の動く時間帯と動かない時間帯を把握し、出来ない部分をサポートする事と、不安な訴えに対し都度傾聴し続けた事で職員との信頼関係が構築されていき、お話を

する事で落ち着きを取り戻すようになった。身体を動かす事も不安軽減に繋がると考え、集団体操や嚙下体操だけでなく、看護師や理学療法士との歩行訓練も開始。時代劇が好きとのお話から、敬老会では職員との剣劇を企画し、職員との迫真のチャンバラを見せて会場を大いに盛り上げた。身体を動かす事によって少しずつK様に活気が戻り、職員に対して医師だった頃の思い出を話してくれるようになる。そこで、ご入居者に向けた医療講演会を提案すると、皆さんの為になるならと張り切って資料の準備をされ、自宅から現役時代のスーツを取り寄せ白衣を用意する。白衣を着てご入居者の前で講演する姿はとても堂々とされ、質疑応答にもハキハキと対応。参加されたご入居者はいつもと違うK様の様子に驚くとともに、熱心に聞き入り、最後には大きな拍手を受け、講演会は大成功であった。

【結果】病気を理解し迅速に対応して不安を取り除いた事で、穏やかな生活を取り戻した。また、K様の人生経験を活かした企画を実施した事で自信を取り戻した。最近では奥様にプレゼントする為買い物に外出する等、家族間にも変化が生まれている。

【考察】
講演会の成功がK様の生活を変化させた一歩であった。関わる職員全員が病気を理解し、気持ちに寄り添う形ができ、信頼関係を構築できた事で生まれた症例であった。